笹原遺跡 I

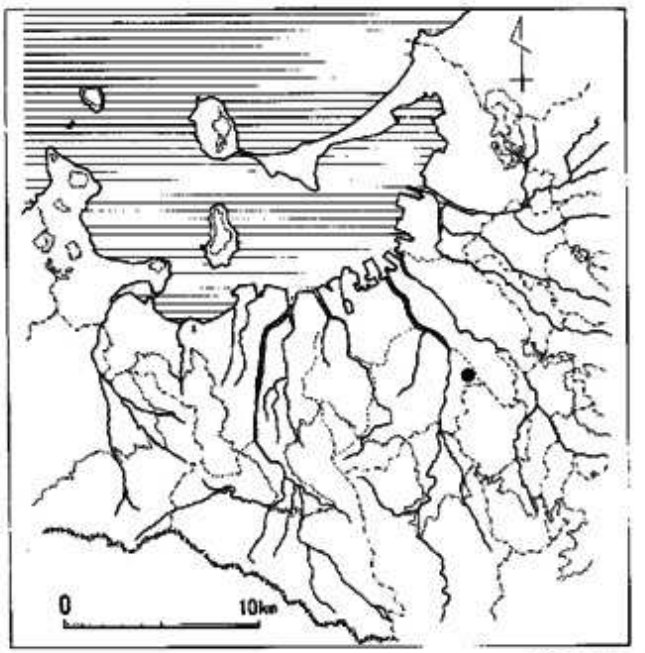
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第359集

1994

福岡市教育委員会

笹原遺跡 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第359集



遺跡略号 SNH-1

遺跡調査番号 9203

1994

福岡市教育委員会

序

福岡市の南郊に位置する南区井尻周辺地域は早くから住宅地として開けてきましたが、近年はさらに再開発が進み、老朽化した家屋の建て替え、マンションの建設など、景観は大きく変貌しています。

本書は住宅・都市整備公団による諸岡団地建て替えに伴って実施された笹原遺跡群第1次調査を報告するものです。調査の結果、古墳時代後期の墳墓群が検出されるなど、多大な成果をえることが出来ました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた住宅・都市整備公団、ならびに関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は住宅・都市整備公団による福岡市南区井尻三丁目の諸岡団地建て替えに伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成4（1992）年度に発掘調査を実施した笹原遺跡群第1次調査の報告である。

2．本書に掲載した遺構の実測・撮影は福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎が行った。

3．本書に掲載した遺物の内、土器の実測・撮影を佐藤、拓影を藤村佳公恵、石器の実測・撮影は二宮忠司（福岡市埋蔵文化財センター）があたった。

4．製図は遺構を星子輝美、遺物の内、土器を佐藤、石器は大庭友子が行った。

5．本書の執筆はⅣ－2の石器の項を二宮が、他は佐藤が行った。

6．本書の編集は佐藤が行った。

7．本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

本 文 目 次

序

I　はじめに……1

1　調査に到る経過……1

2　調査の組織……1

II　遺跡の位置と環境……1

III　発掘調査の概要……4

IV　遺構と遺物……4

1　検出遺構……4

土壙……4

2　出土遺物……8

V　小結……11

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第2図　笹原遺跡第1次調査地域周辺図……3
第3図　笹原遺跡第1次調査遺構配置図……折り込み・5
第4図　土壙実測図……6
第5図　土壙実測図……7
第6図　出土土器実測図……9
第7図　出土石器実測図……10

図　版　目　次

図版１．笹原遺跡周辺空中写真
図版２．１．笹原遺跡第１次調査Ⅰ区全景（西から）
　　２．笹原遺跡第１次調査Ⅱ区全景（東から）
図版３．１．笹原遺跡第１次調査Ⅲ区全景（北から）
　　２．SK33土壙（南から）
図版４．１．SK34土壙（北から）　　２．SK35土壙（北西から）
図版５．出土土器
図版６．出土土器

I　はじめに

1　調査に至る経過

1991年９月、住宅・都市整備公団九州支社から本市に対して南区井尻三丁目16番における諸岡団地建て替えに伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの笹原遺跡群の隣接地にあたり、福岡市教育委員会埋蔵文化財課は、これを受けて1991年10月16･23日に試掘調査を実施した結果、現地表下約１mで部分的に遺構面が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積9,000㎡の内遺構が確認された3,100㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。住宅･都市整備公団九州支社と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は翌1992年4月13日から7月31日まで行われた。

2　調査の組織

調査委託　住宅・都市整備公団九州支社

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括　埋蔵文化財課長　折尾学

第２係長　塩屋勝利（前任）　第２係長　山崎純男

庶務担当　寺崎幸男　吉田麻由美

調査担当　試掘調査　井沢洋一　加藤良彦　青武学

発掘調査　佐藤一郎

発掘作業・資料整理協力者　出雲義住・蒲池雅徳・関義種・田出橋和男・松永武士・岩永靖子・江越初代・奥田弘子・北野睦代・久良木シズエ・佐々木幸子・関加代子・曽根崎昭子・舎川キチエ・広川道枝・本河富枝・村上エミカ・村上エミ子・田中ヤス子・藤野邦子・藤村佳公恵・相川和子・星子輝美・下河純子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の住宅・都市整備公団九州支社、施工の森組・上村建設工事共同企業体をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進み無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II　遺跡の位置と環境

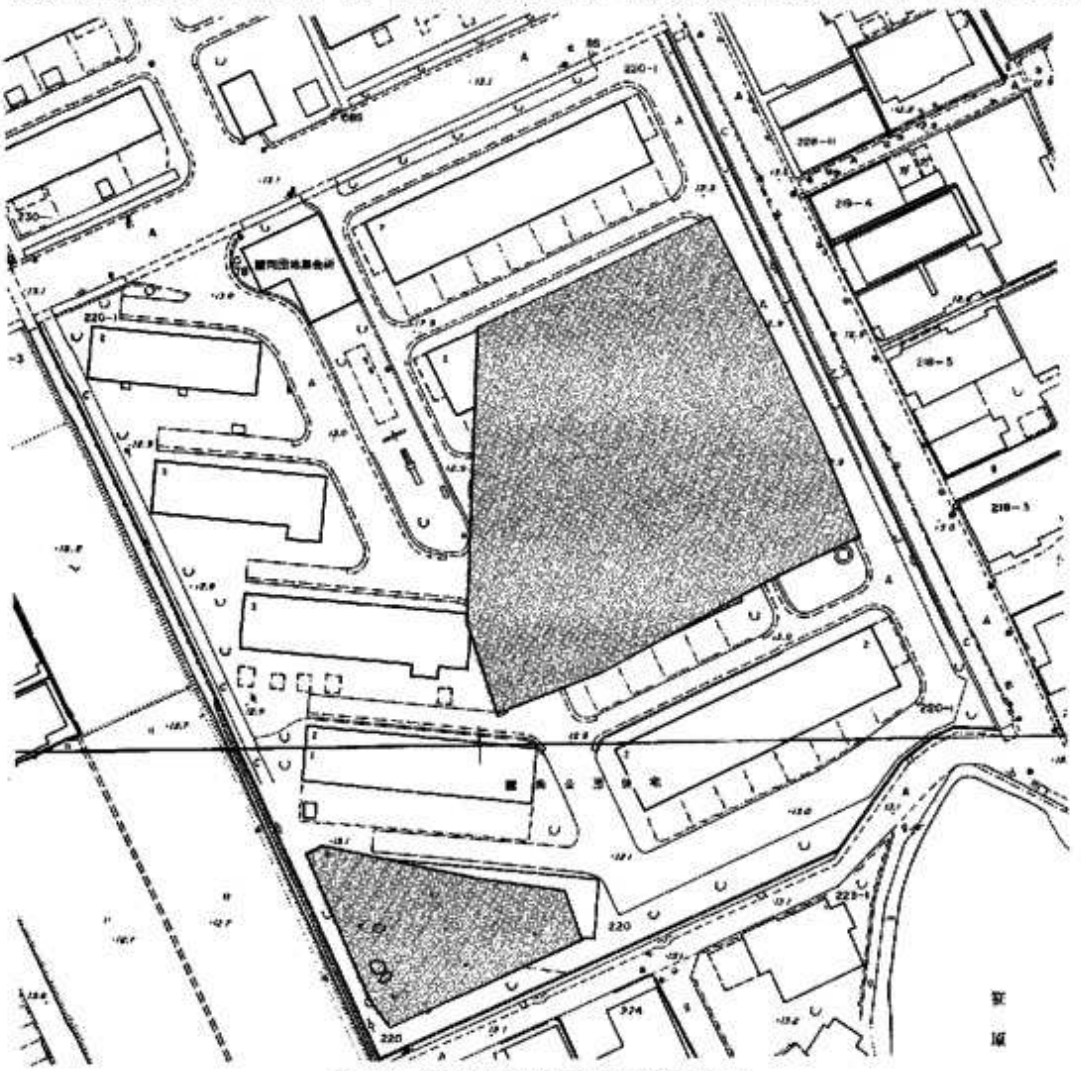
笹原遺跡は背振山系から源を発する那珂川と、牛頸・四王寺山地から発する御笠川とによって形成された福岡平野の那珂川下流右岸に位置する。両河川間を春日市白水大池に源を発し北

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

西に流れ御笠川に合流する諸岡川は牛頸山麓から北に伸びる台地を開析し、河道の周辺に谷底平野を形成している。笹原遺跡は台地に挟まれた谷底平野に立地し、その名の示す通りもとは笹の生い茂る原野であり、新田開発されたのが寛永9（1639）年で、低湿地であったがために開発が及び難かったのであろう。

周辺の台地上には、諸岡遺跡群、井尻B遺跡群をはじめとして濃密に遺跡が分布する。

諸岡遺跡群は笹原遺跡の北約500mに位置し、1972年の発掘調査を嚆矢として現在まで次にわたって調査が行われている。旧石器時代ではナイフ形石器などの包含層、縄文時代晩期の夜臼式土器に伴う竪穴住居跡・土壙が検出されている。弥生時代前期の土壙群からは板付II式土器に伴って朝鮮系無文土器が出土している。中期には甕棺墓地が営まれ、甕棺からゴボウラ貝製貝輪や細形銅剣が出土している。古墳時代には古墳、小形墳墓が営まれている。中世に入ると、



第2図　笹原遺跡第1次調査地域周辺図

集落、居館の他、地下式土壙が検出されている。

諸岡遺跡群は笹原遺跡の西約500mに位置し、1986年の第1次調査では細石刃文化期の包含層、弥生時代から古墳時代前期の集落、墓地群が検出されている。5世紀後半の古墳の周溝が検出されたが、円筒および家形埴輪が出土している。

III　発掘調査の概要

調査は、申請面積9,000㎡の内遺構が確認された3,100㎡を対象にし、遺構が確認されなかった部分は既に建設工事が着手され、工事と並行して調査を行うかたちとなり、調査区は工事が先行する部分から先に着手し、北側の調査区を北側からI区、II区と区分し、1区を先に調査を終了させ工事に明け渡す工程で進められた。表土剥ぎは4月13日からI区、II区を併せて行い、4月15日から作業員を入れ、遺構の検出に入った。1950年代に建設された鉄筋2階建ての旧建物の基礎、排水溝、上水道管敷設のために掘削された溝等の攪乱が縦横に走り、その除去に多大な労力を要した。I区では明確な遺構は検出されず、地山である二次堆積の黄褐色にブロック状に散在する黒褐色粘土中から、須恵器片、石鏃、石匙が出土した。黒褐色粘土ブロックは人為的に掘り込まれた形跡はみられず、周辺域からの遺物包含層の流れ込みかとみられる。5月28日に全景の写真撮影、5月22日から遺構実測にかかり、5月28日にI区の調査を終了し、I区の実測と並行して5月28日からII区の遺構検出に入ったが、I区でみられた攪乱に加え給水塔の基礎による攪乱がその東半部に大きく及んでいた。6月11日に全景の写真撮影、翌6月12日から遺構実測にかかり、6月17日にII区の調査を終了した。団地南東端のIII区の表土剥ぎはII区の実測と並行して6月20日から行い、7月1日から作業員を入れ、遺構の検出に入った。I・II区ほどではないが、広範囲に攪乱を受けている。7月7日からは遺構の検出に入った。調査区の南東部で青灰色砂粘質土の地山に掘り込まれた埋土が黒色粘質土の土壙群を確認し、そのいずれも土器が埋納されていた。7月中旬までは雨期で調査の方は滞り、全景・個別の写真撮影は7月21日に行い、遺構実測は7月22日から着手し、7月30日の埋め戻しで調査は終了した。

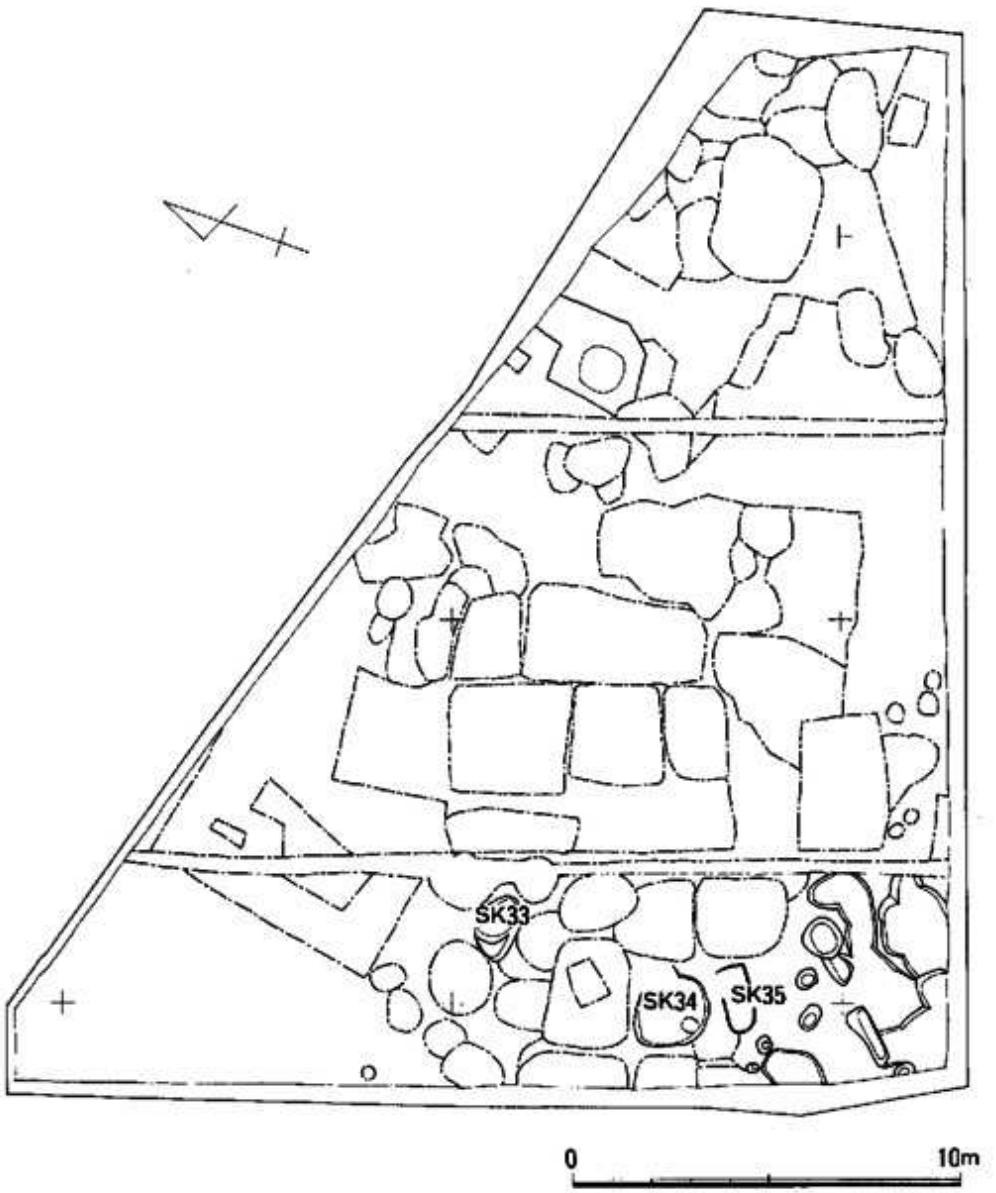
IV　遺構と遺物

1　検出遺構

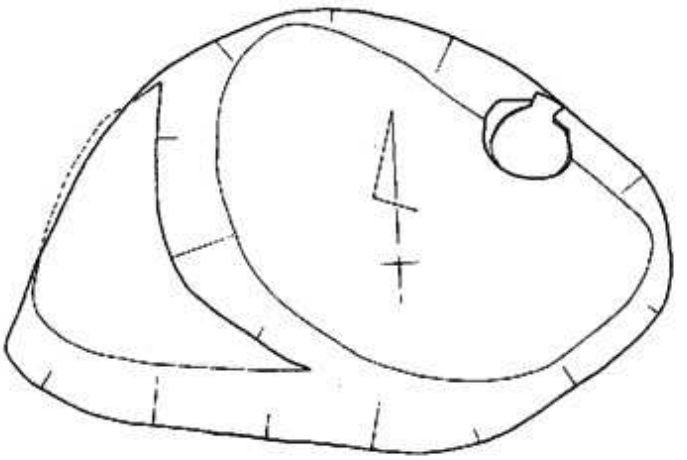
土壙　III区南東部で3基検出された。

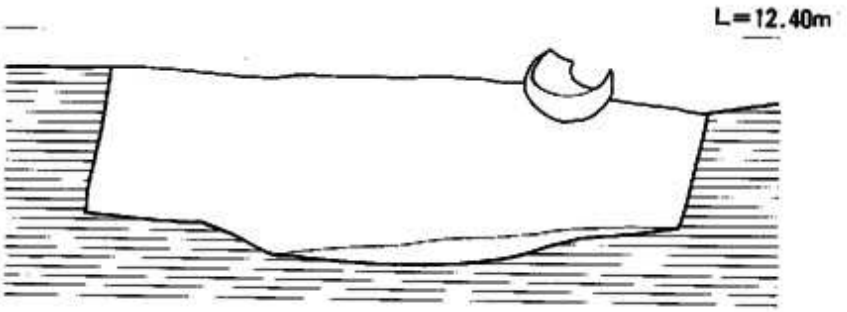
SK33（第4図、図版3）　調査区の南西で検出された平面形が不整楕円形を呈する土壙である。全長1.6m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。須恵器甕が底面より30cm浮いた状態で出土した。

第３図　笹原遺跡第Ⅰ次調査遺構配置図

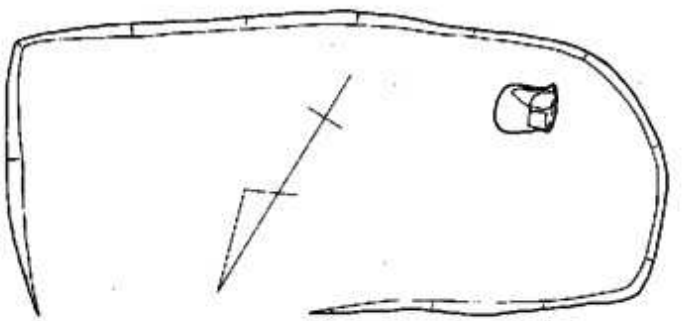

SK33
SK34
SK35
0
10m

SK33

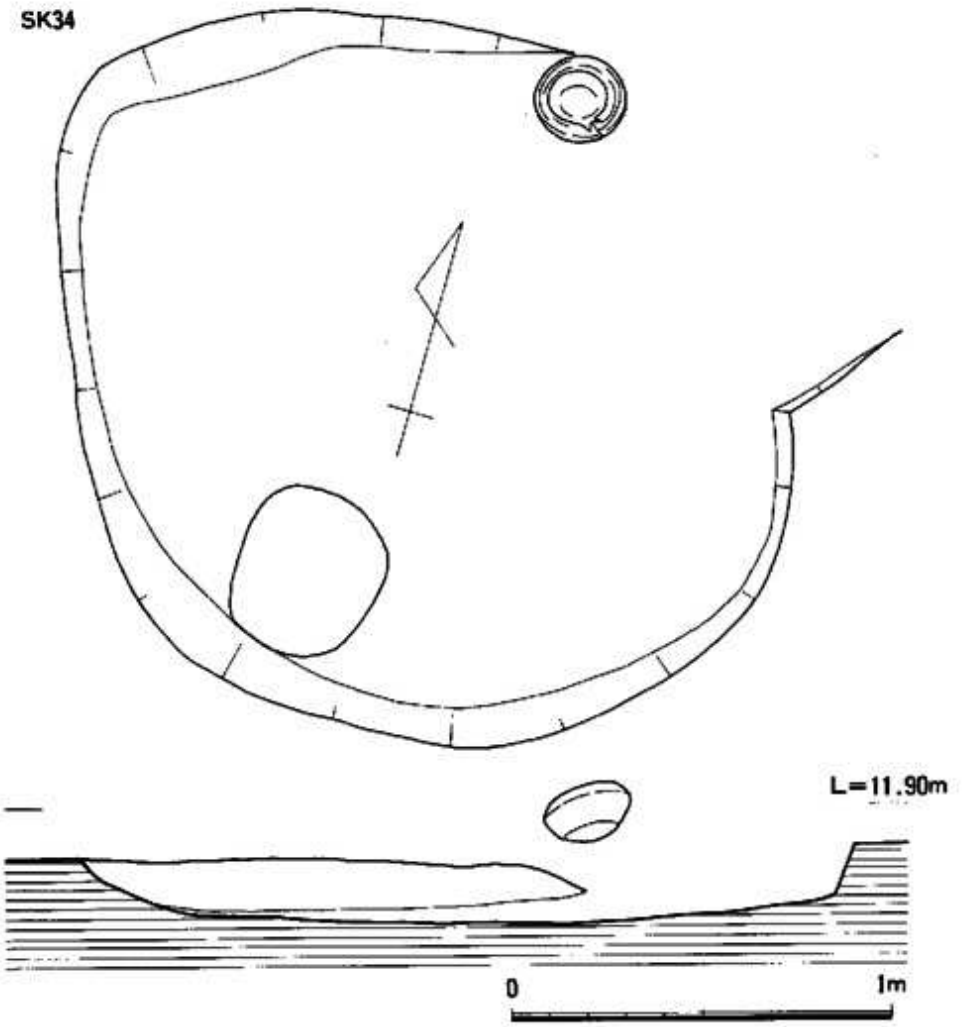




SK35



第4図　土壙実測図(1)



第5図　土壙実測図(2)

SK35（第4図、図版4）　調査区の南西で検出された平面形が隅丸長方形を呈する土壙である。全長1.7m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。土師器甕が底面に接し横臥した状態で出土した。方位はN－60°－Eにとる。

SK34（第5図、図版4）　調査区の南西で検出された平面形が不整円形を呈する土壙である。直径1.8～2.2m、深さ0.2mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。口縁部を打ち欠いた須恵器壺が底面から20cm浮いた状態で出土した。遺構の東北が試掘トレンチにより失われている。試掘調査の際、土師器皿が採集されているが、SK34出土の須恵器壺の蓋として被せられていた可能性が大きい。

2　出土遺物

SK33出土土器（第6図、図版5）

須恵器　甕(3)　肥厚する口縁部は下方に垂れ、口縁下に突帯をめぐらしたようにみえる。肩部と胴部の境付近の屈曲部に最大径をとる。口縁部は横ナデ、胴部外面は上半がカキ目、下半が擬格子叩きの後乱雑なカキ目を施す。内面は上半が横ナデ、下半は青海波が残る。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

SK35出土土器（第6図、図版5）

土師器　甕(4)　ややすぼまった胴部上半部にゆるやかに外反する口縁部がつく。口縁部内面の稜は不明瞭である。底部は不完全な丸底である。口縁部は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りを施す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

SK34出土土器（第6図、図版5）

須恵器　短頸壺(1)　口縁部は打ち欠かれ、打面調整が施されている。平坦な底部には高台が貼付されていたが、すべて剥離しており形状は不明である。胴部は丸みをもち、肩部の屈曲の上位に3条の沈線がつき、その間を細かい波状文で埋める。胴部内面から外面上半にかけて横ナデ、下半はヘラ削りを施す。外底部は未調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。

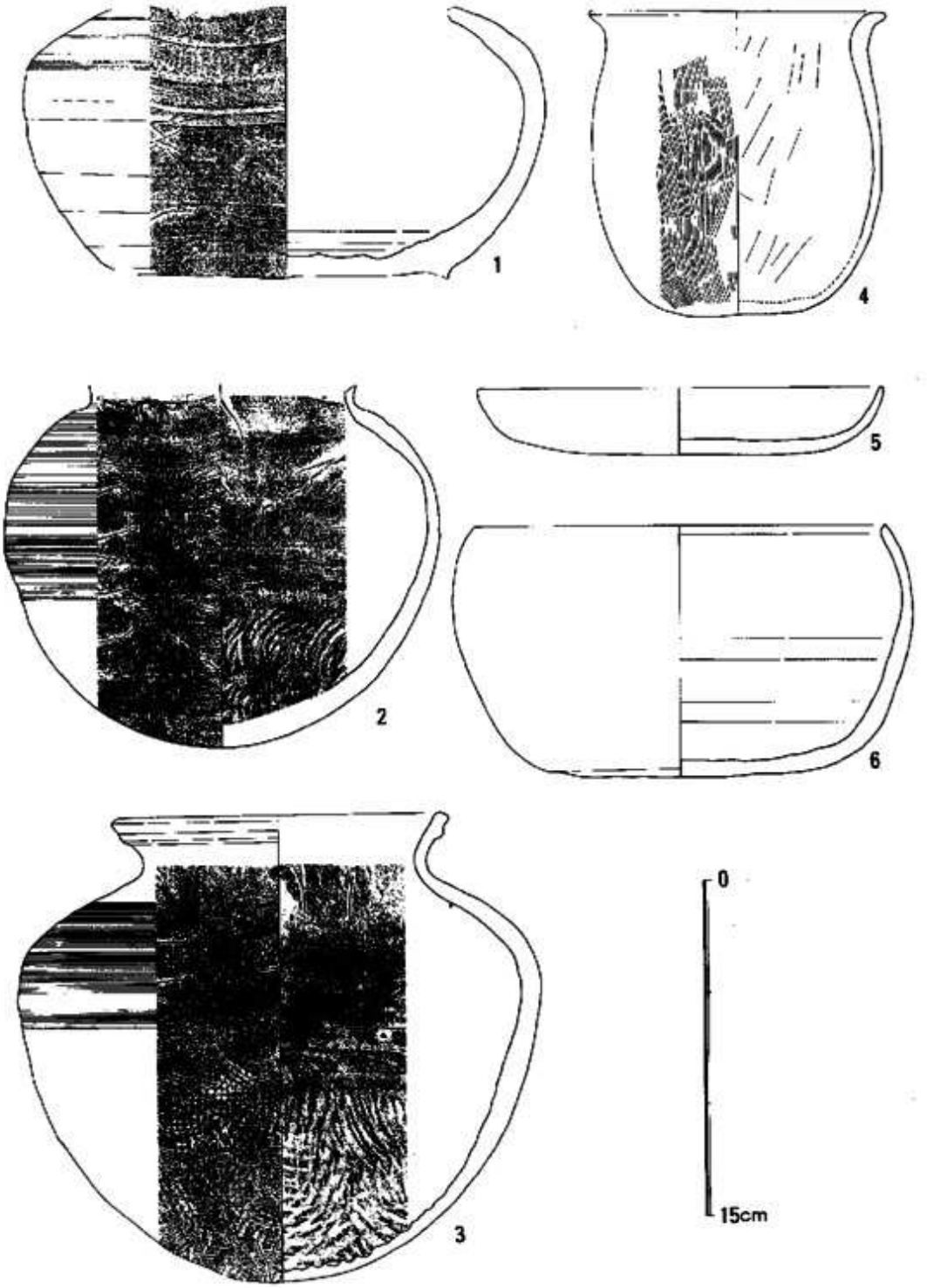
試掘トレンチ出土土器（第6図、図版5）　先述の通りSK34の東北にかかる試掘トレンチより土師器皿が採集されているが、SK34出土の須恵器壺の蓋として被せられていた可能性が大きい。

土師器　皿(5)　口縁部は内湾気味にのび、端部を細くおさめる。底部との境は不明瞭である。内底から口縁部外面にかけて横ナデ、外底部は未調整である。口径20.3cm、器高3.1cmを測る。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

遺構外出土土器（第6図、図版5）

須恵器　甕(2)　口縁部より上位は欠失している。胴部中位よりやや上位に最大径をとる。胴部外面は上半がカキ目、下半が擬格子叩きの後乱雑なカキ目を施す。内面は上半が横ナデ、下半は青海波が残る。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、淡青灰色を呈する。Ⅰ区黒褐色土層出土。

土師器　椀(6)　体部は上位でややすぼまり、端部をやや細くおさめた口縁部がつく。口縁端部は平坦で、内傾する。体部と底部との境は不明瞭である。内底から体部外面の底部付近にかけて横ナデ、外底部は未調整である。口径18.4cm、器高11.3cmを測る。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、明赤褐色を呈する。Ⅱ区黒褐色土層出土。



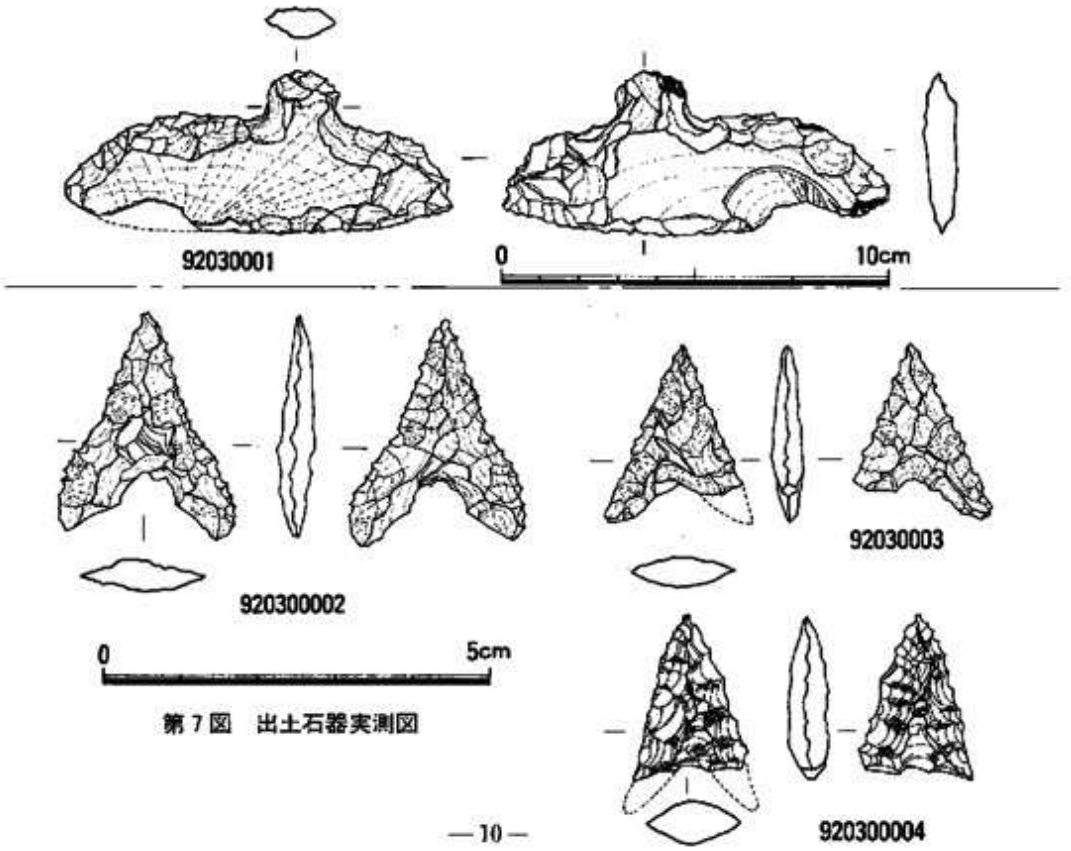
第6図　出土土器実測図

石器（第７図、図版６）

石器は、Ｉ区黒褐色粘質土より　点出土し、その内４点を図示した。

１は、縄文時代前期の遺跡からよく出土する横匙である。横剥ぎによって横長剥片を造出し、肉厚の端部を加工し、「つまみ」を造出している。刃部は打面側に造出しているが、これは、剥片の形状によるものであろう。刃部の端部に欠損した部分があるが、風化の具合またこの部分が剥片を剥取した際の打面に位置することから意識的に剥取したものと考えてよい。石材は、サヌカイト、10cm×4.2cm、重量27gで中型の範疇にはいる。

２から４は、石鏃で横匙と同じＩ区黒褐色粘質土より出土した。２は両側面が鋸状を呈するいわゆる鋸歯鏃の範疇に入る。表面中央部には、まだ段階状剥離が認められるが完成品として考えてよい。抉入部は、約1/3程まであるが、大まかな剥離で仕上げている。重量２g、サヌカイト製石鏃である。３もサヌカイト製石鏃で片脚を欠損するが、重量が１gと軽い。二等辺三角形を呈する形状で、断面はレンズ状を呈する。剥離は両端からの押圧剥離によって大まかに仕上げでいる。風化は著しい。４は、黒曜石製の石鏃で両脚が欠損している。断面は非常に肉厚のレンズ状を呈し、このため抉入部のえぐりは両端から鋭利な角度によって施されている。形状は、二等辺三角形を呈するものと思われる。重量は、現在2.5gであるが、完形品であるならば３g以上の重さであろう。



第７図　出土石器実測図

V 小 結

今回の調査で検出された遺溝は、調査区の南西隅に限定されている。開発が活発化する以前の地形図、空中写真から察せられるが、調査区の周辺には溜池が多く分布し、新田開発された寛永9（1639）年以前は底湿地であったがために開発が及び難かったのであろう[註1]。今回検出された土壙群は土器が供献された土壙の規模、形状からみて伸展葬の形式をとる墳墓と見なされよう。集落、水田等の生産遺跡が検出されなかったことは、それらを営むには立地条件が劣悪であり、墓地として土地利用にとどまったのであろう。なお、第1次調査中に今回の調査区域より南東約350mの笹原遺跡群に含まれる地点で共同住宅建設に伴い試掘調査のが実施されたが、底湿地であったと思われる土層堆積が認められ、遺構、遺物ともに確認されていない[註2]。

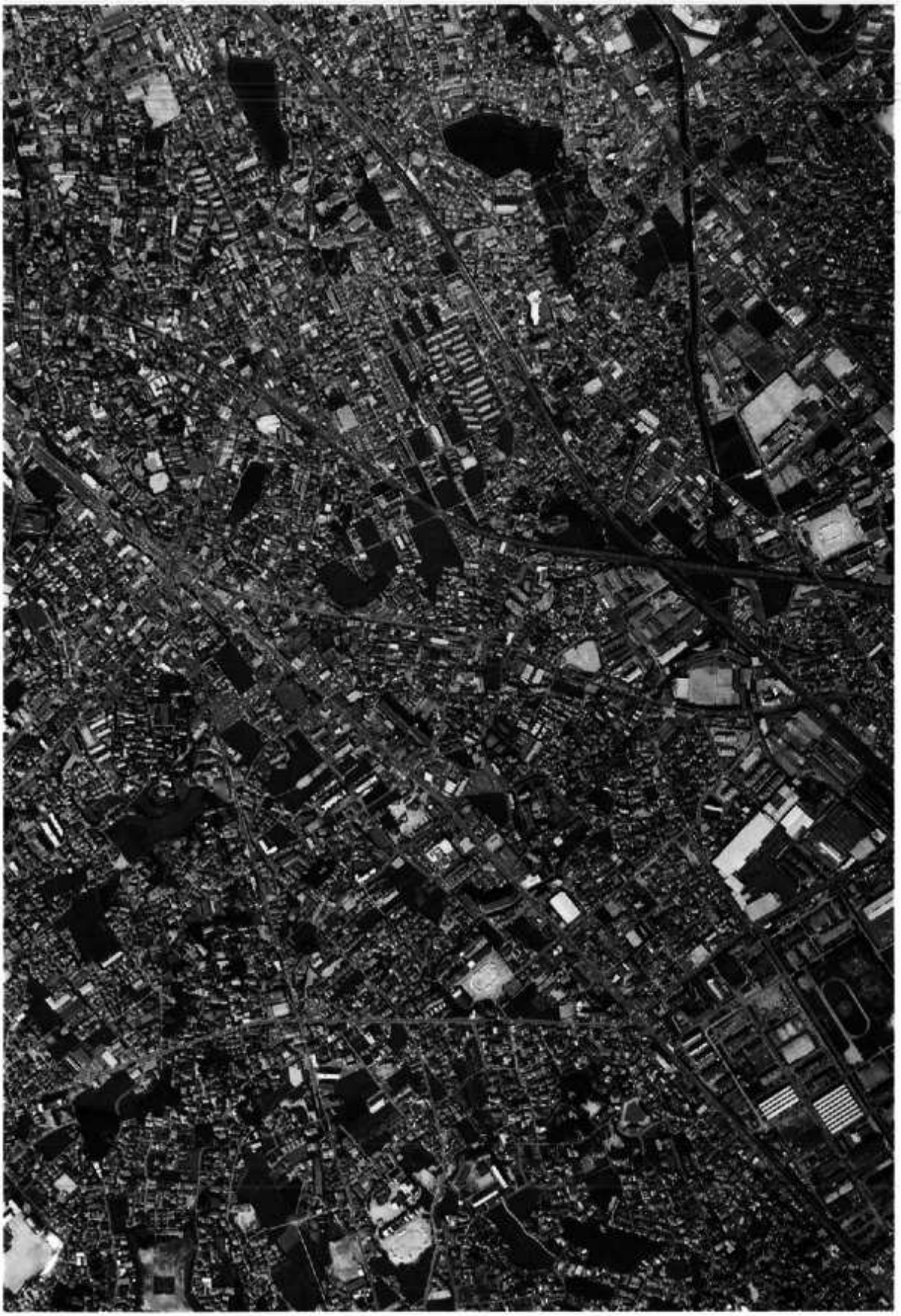
土壙SK35出土の土師器甕は、不完全な丸底の底部にややすぼまった胴部上半部、ゆるやかに外反する口縁部、不明瞭な内面の稜といった特徴をもち、小郡市干潟遺跡出土の土師器小型甕I式と共通した形状をとり、共伴した須恵器の年代観から7世紀中葉あるいはそれよりやや下る時期に実年代を求めることができる[註3]。

笹原遺跡で検出された甕や壺を全長1.5m、幅1.0前後の楕円形、隅丸方形の土壙に据え置いた例は、近辺では南区野多目A遺跡第4次調査で検出されている。時期は笹原遺跡のものよりやや下がって8～9世紀と比定されている。笹原遺跡と同じ低湿地性の遺跡で、調査区域内では墓地のみで、同時期の集落、生産遺跡は検出されていない[註4]。

福岡市域およびその周辺では、古墳の終焉から律令期に至る庶民の墳墓の様相が集落のそれほど明確に把握されてはいない。笹原遺跡より約1.2km南東の南八幡遺跡では集落内で墳墓と見られる竪穴が散発的に検出されているが[註5]、笹原、野多目A遺跡で検出されたような集落から隔絶された劣悪な立地条件で営まれた共同墓地との相違がどこに起因するのかなど、今後資料の蓄積とともに検討すべき課題は多い。

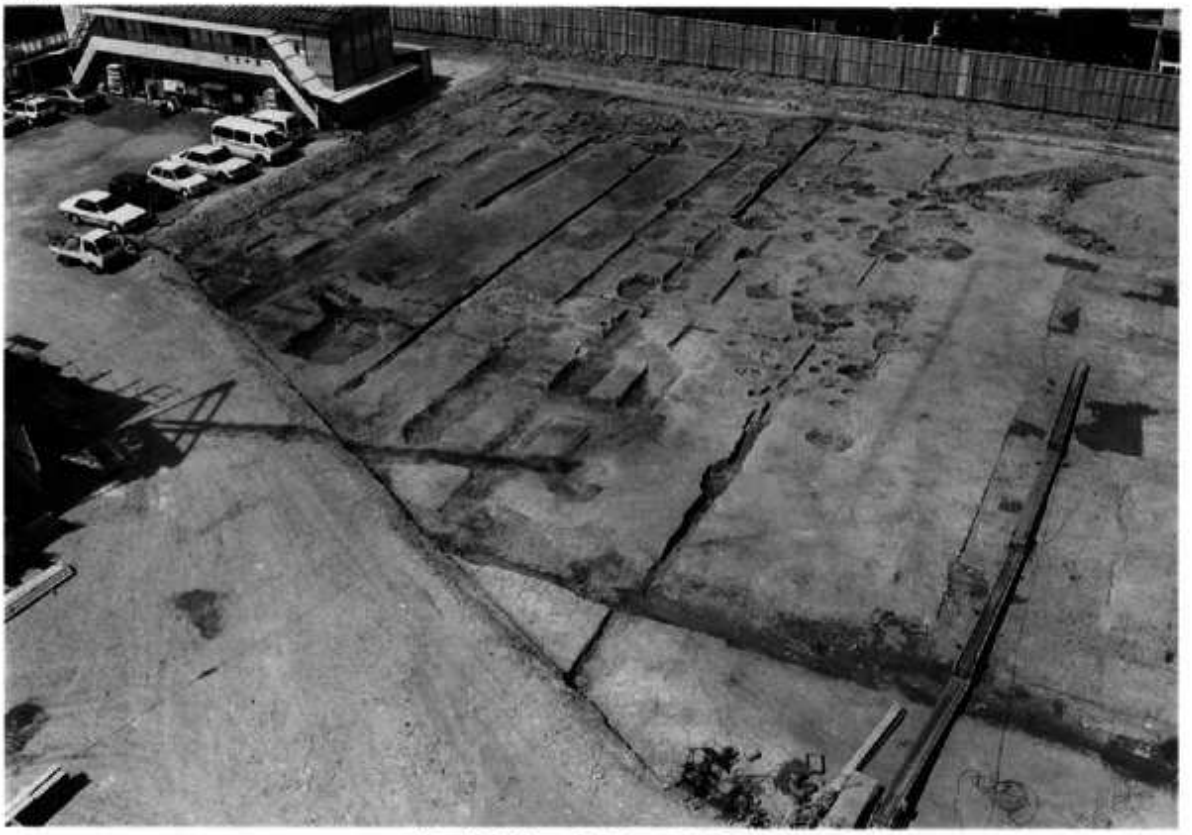
註1　川添昭二他編　『福岡県地名大辞典』　1988
註2　1992年5月11日に実施。
註3　福岡県教育委員会　「干潟遺跡1」　福岡県文化財報告書第59集　1980
註4　1992年、福岡市教育委員会調査。
註5　福岡市教育委員会　「トヲナシ遺跡」　福岡市埋蔵文化財報告書第128集　1986
　　福岡市教育委員会　「南八幡遺跡」　福岡市埋蔵文化財報告書第181集　1988

図　　版



笹原遺跡周辺空中写真

図版 2



1．笹原遺跡第Ⅰ次調査Ⅰ区全景（西から）

2．笹原遺跡第Ⅰ次調査Ⅱ区全景（東から）

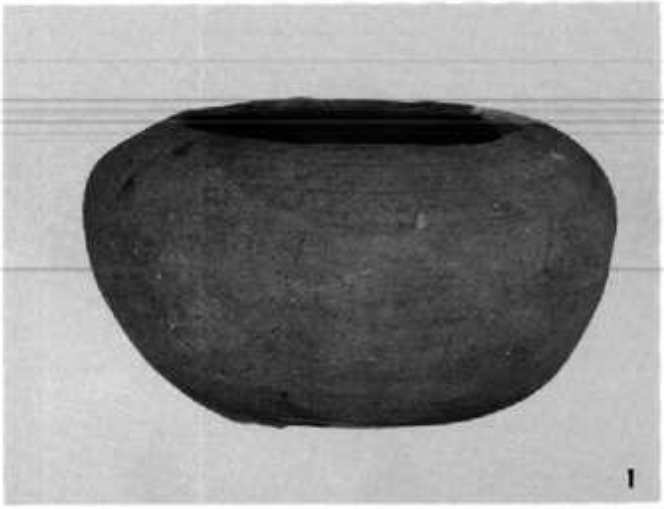
1．笹原遺跡第1次調査III区全景（北から）

2．SK33土壙（南から）

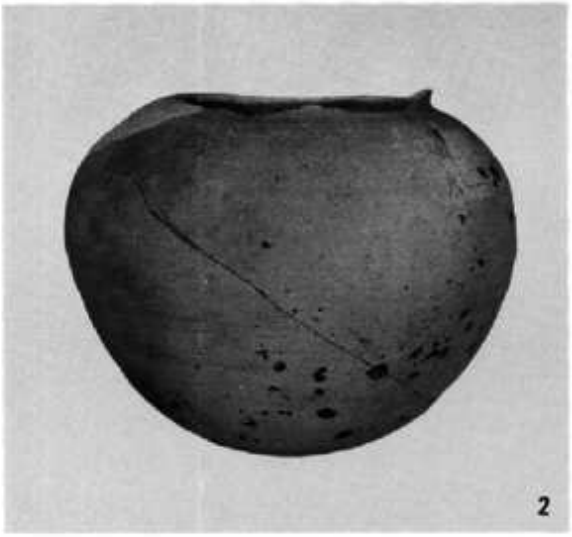
図版 4

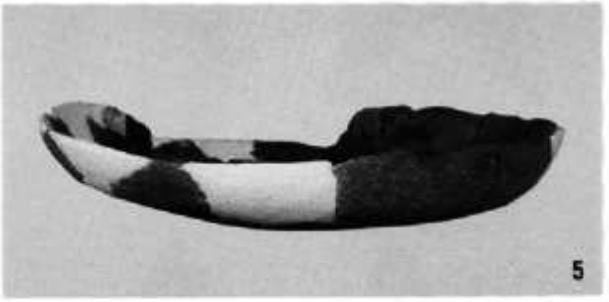
1．SK34土壙（北から）

2．SK35土壙（北西から）


1

4

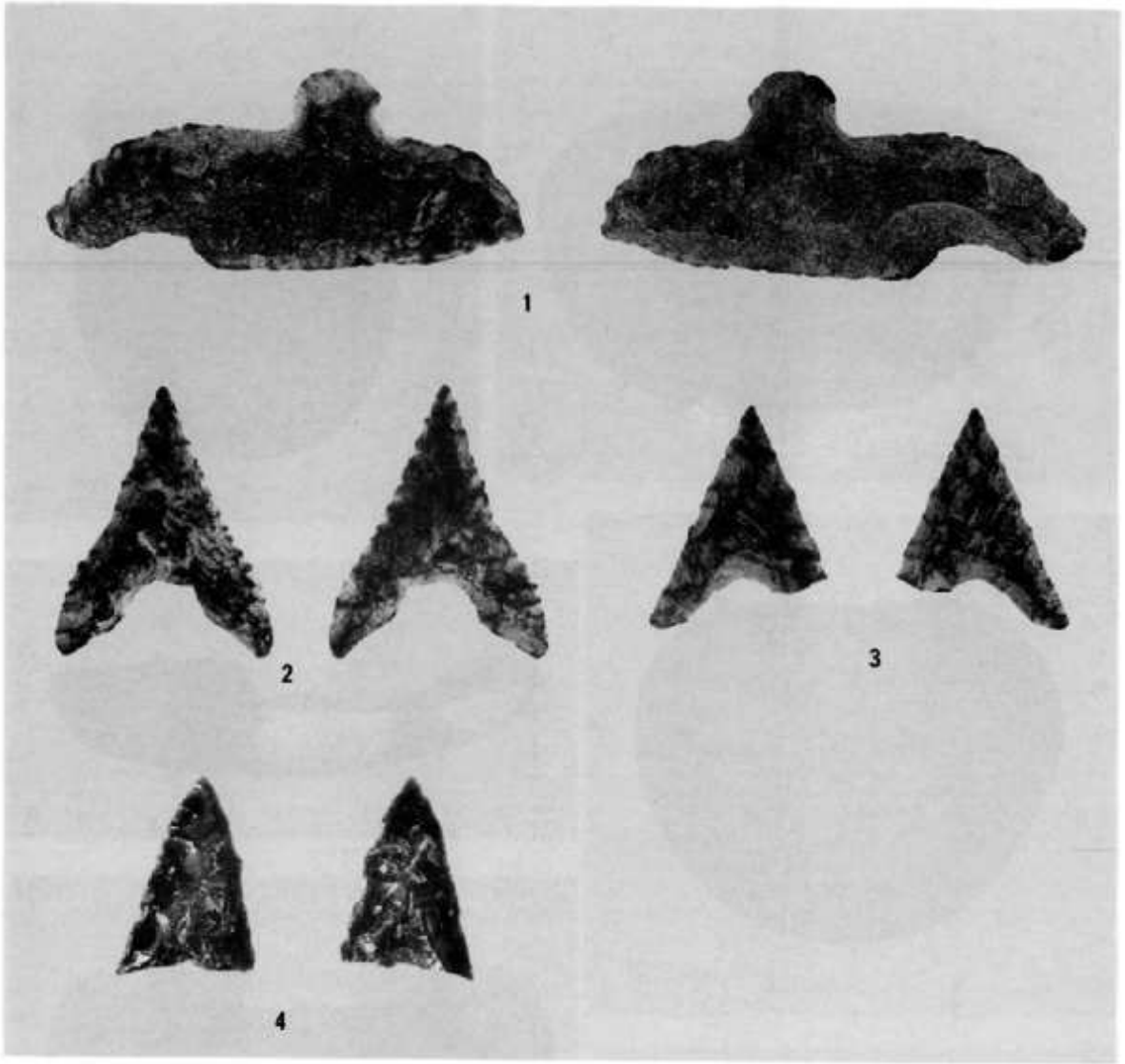

2


5

3

6

図版 6



笹原遺跡 I

1994年（平成6年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印　刷　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺三丁目28番1号